

今あるものづくりを その先の未来へ

e 建具

TATEGU

2013

3月号



木材利用ポイントの概要発表

トップインタビュー | 阿部興業(株) 阿部清英社長

顧客層を絞って合致する商品を提供

社会環境や経済環境の流動的な変化の影響から住宅産業を取り巻く市場やニーズも従来と変わってきた。市場が大きく変化する中、建具業界も時代に対応していく必要に迫られている。建具のトップブランドとして長年業界をリードしている阿部興業(株) (東京都新宿区、阿部清英社長) も、こうした時代の変化を感じ、これからの時代に合致した展開を模索している。同社の阿部清英社長にインタビューし、今後の市場の見通しや事業戦略、建具業界への思いなどについて話を聞いた。

— 新築需要は少子高齢化などの社会的な影響もあり、全国的な規模で見れば、今後縮小傾向になることは確実です。こうした市場の状況を考え、大きな方向性として、貴社は現在および近い将来、住宅市場の展望をどの様に見ていますか。新築、リ

フォーム、物件対応など、どの市場をターゲットとし、どのような営業的なアプローチをかけていくのか、お聞かせください。

阿部 大きな方向性としては、時代の流れであるグローバル化、少子高齢化、夫婦共働き、時代に受け入れられる商品創りと、多方面の市場に向けアプローチをかけていきます。社会的な環境は少子高齢化であり、現在及び将来的な市場展望は140万戸以上の着工件数が90万戸を割り込み、今後も全体の着工数は減少傾向と言われていますが、ゼロになるわけではありませんし、中古住宅の流通活性化が進む中でリフォーム需要もあります。ニーズも日々変化しており、大手パワービルダーのローコスト住宅のニーズがあれば、自分だけのオリジナル住宅を求められるニーズもあります。弊社では、その多様なニーズに応えられる強みがあり、進化して取り込みを図ります。また、販売地域の拡大として、国内では名古屋地区から西への進出、海外ではASEAN市場への進出による販路の拡大を予定しています。

阿部興業(株) 阿部清英社長

第2回世界木門大会で野中晃氏が講演 高齢化配慮など日本の住宅市場を解説

第12回中国国際門業展覧会の開催に併せ、木製ドアに関する世界的な技術系フォーラム「第2回世界木門大会」が3月12日、北京市の中国国際展覧中心新館で行われた。



世界木門大会の講演者と主催者

この会議は国際木文化学会（略称 I W C S）の主催によるものであり、世界各国の木製ドアに関する学者や開発者による研究内容の発表の場となっている。今回の会議では中国、日本、イタリア、セルビア、ドイツから客員講師を招き、木製ドアの最新技術、開発の歴史、木製ドアの市場動向などをテーマに論じた。

このフォーラムにおいて、日本から



フォーラムで講演する野中氏

ら日本木製ドア工業会の野中晃理事長がゲストスピーカーとして参加。

「日本における木製ドアの市場傾向」と題した講演を行った。野中氏は日本のドア市場を①高齢化配慮、②省エネ化、③安全性という3点の切り口から論じ、現在のドア市場の総合的な方向性を解説。高齢化が進む日本の社会では、高齢配慮が住宅に求められており、ドアも家庭内事故を防止する工夫を施さなければならぬ。このため、ソフトクローズ機能や自閉式の引戸用金具などの開発が進行し、「簡単に開閉できる高齢者にも操作しやすいドアが市場で求められており、そのためにソフトクローズ機能や2方向スライド機能を有するドア金物の開発がされている」と、ユニバーサルデザインの思考がドアにも取り入れられているという現状を語った。

省エネ化が何故求められるかとい

う理由について「一昨年の東日本大震災によって福島第一原子力発電所が破壊されたことを契機として、日本国内全土で電力が不足する事態となった。そこでエアコンによる空調に頼ることなしに、冬は暖かく夏は涼しい住宅が求められるようになった。その意味で断熱性の高い木製玄関ドアや木製サッシは評価されており、加えて電力を自宅で創出するために太陽光発電の人気も高まっている」と分析。木製建具は断熱性能の高さが魅力であり、熱損失を示すU値においても他の素材に比べて有利であることを訴えた。

安全面では、日本でも近年の木質建材は防火性能の開発が進み、防火戸としての認定を受けた製品が市場に普及していることを語った。また、玄関ドアやサッシなどの建物外部の建具製品だけではなく、突板張りにした木材の下に防火材を使うことで内装材として耐火性を有する技術も開発されており、様々な使い方が存在する旨を述べた。

最後に、最近の日本の住宅デザインを説明。デザイナーが手掛ける感性豊かな住宅の登場など、木質建材を取り入れた最新デザインを伝えた。